

あの花が咲く丘で 君とまた出会えたら あらすじとネタバレと感想

高校三年生の百合は十分大学に進学できる学力を持ちながら就職を希望します。理由は家庭が裕福ではないから。父親は他人の子供を助けて命を失っています。母子家庭で百合を育てるため、母はスーパーで魚をさばく仕事やコンビニのアルバイトを兼務し、必死で働きます。しかし家庭は裕福ではありません。いつも魚の匂いがする母、それを揶揄するクラスメイト達。どうしても百合は素直になれません。大学進学のコストをしっかりと貯めているといい、子供を助けて亡くなった優しい父を尊敬する母。しかし百合は他人の子供助けたせいで愛する妻と子供（百合）が貧乏生活を送っている事に納得できず、母親と喧嘩になります。喧嘩し家を飛び出す百合。子供たちが秘密基地にしている洞穴に入りいつしか眠ってしまいます。そしてそこに落雷が…

目覚めると、そこは1945年の6月、そう太平洋戦争末期の日本だったのです。見知らぬ町をさ迷う百合。灼熱の町を徘徊するうちに熱中症（と思われる）になり町角に座り込みます。そこを通りかかった佐久間彰という軍服を着た青年に助けられます。佐久間は陸軍指定の食堂、鶴屋食堂に百合を連れて行き、女将のツルに食べ物をあげてほしいとお願いします。ツルと佐久間の「特攻隊員」という会話を聞きながら食事をしている時、机にある新聞を見る百合。その日付が1945年6月だった事で自分がタイムスリップした事に気がきます。混乱した百合は食堂を飛び出し、洞穴に戻ります。「帰して」と壁を叩くも何も起こらず、一晩明け百合は鶴屋食堂に戻ります。女将のツルは百合に住み込みで働かないかと提案、当時の服装であるもんぺも渡します。

すっかり1945年の少女となった百合は、鶴屋食堂の看板娘として働き始めます。鶴屋食堂には近隣の女学生である千代が度々新鮮な魚を指し入れます。全ては特攻隊員たちのために特別に用意された食料でした。

千代は佐久間達特攻隊員の中のムードメーカー石丸のお陰で今の環境の馴染めた事で、石丸に密かに思いを寄せるのでした。

そこに現れる佐久間達特攻隊員。特攻に意味があるのかという素直な疑問を投げかける百合と衝突する隊員もいますが、皆百合と優しく触れ合います。

そんな百合を、百合の花咲く丘に連れ出す佐久間。佐久間には百合と同じ年の妹がおり、佐久間は百合と妹を重ね合わせ、お互いに彰と百合を呼び合う事にします。

次第にお互い惹かれ合う彰と百合。戦争中でも百合の周囲は平和に見えます。そんな時、百合はツルからお使いを頼まれます。百合は「後少しで戦争は終わる」そうつぶやきながらお使いを終え帰路につきます。後2ヶ月経てば、そんな思いを持っていました。

しかしそんな時、上空に大量の米軍戦闘機が現れます。

「空襲だ」「逃げろ」の怒号が飛び交うなか、「嘘でしょ」と呟く百合。あくまで世は戦時中、そこに安全な場所などありませんでした。

空襲に巻き込まれ逃げ場を失い「お母さん助けて」と叫ぶ百合。そこに現れた彰。百合を助

け二人で逃げだします。

お互いを大切な存在とハッキリ認識します。

辛くも空襲を逃れたいつもの町並み。

鶴屋食堂に無言で入ってくる千代。続いて佐久間達、特攻隊員たち。いつも以上に明るく振舞います。一番年下、まだ18歳の隊員、板倉は「本当に皆さんは兄弟のようだ」と言ったところで、場は静まり返ります。静かに立ち上がりツルたちのいる厨房に向かう最年長32歳の隊員、寺岡。寺岡は結婚し子供が生まれたばかり。しかし結婚後、すぐに特攻隊員に志願したため、一度も子供に会っていません。

そんな寺岡はツルに「出撃命令が下りました。二日後飛び立ちます」と告げます。「おめでとうございます」と返すツル（特攻隊員達は皆志願兵（という体）。特攻隊員隊のために食事を用意する立場のツルたちは隊員たちの、愛する人、国を守りたいという誇りを尊重し、暖かく見送り事しか出来ないのです）。

「死ぬんだよ。何がおめでとうなの」百合は呟きます。

一人落ち込む百合の元に隊員たちが現れ「板倉を見なかったか」と訊ねます。

隊員たちと一緒に板倉を探す百合。百合と彰はいち早く板倉を発見します。

「見逃して下さい」と懇願する板倉。「俺たちは志願兵ではないか」と諭す彰。

「自分には許嫁がいます。まだ16歳です。家族は空襲で死に自分（許嫁）も自分の足では動けなくなった。会いたい。死にたくない」と。

そこに駆け付けるその他の隊員たち。「逃げ出す等、誇りを忘れたか」激昂する加藤。「加藤さんだって父親が逃げ出したからその汚名を晴らすためだけでしょう」と返す板倉。加藤の父は特攻から逃げ出し軍の中で蔑まれていました。「貴様、生き恥をさらす気か」と詰め寄る加藤。「生きたいと思う事のどこがいけないの。生き恥なんて言葉を言わないで」百合は叫びます。「行け」静かに告げる寺岡。「板倉、俺たちの分まで生きてくれ」最後に語り掛ける彰。

あの花が咲く丘で百合は彰に語り掛けます。「一緒に逃げよう。もうすぐ戦争は終わるんだよ」しかし「もし俺たちが逃げ出せば日本はなくなるかもしれない。男は皆殺され、女子供もどうなるかわからない」と返す彰。そんな事にはならない、日本はなくなると必死で話す百合。「俺は教師になりたかった。これからの子供たちは好きな事をして好きに生きる時代になってほしい」百合はそんな時代になる事を告げるも彰の決意は変わりません。

出撃前夜、彰、石丸、寺岡、加藤の四人は鶴屋食堂に集まります。酒を酌み交わし明日は祖国のために散る決意を口にします。自分達の死は決して無駄ではない、愛する人のためにこの国を守るために散るのだと。

食事を終え、これまでのお礼を告げる隊員たち。姿の見えない千代に石丸は「もう行っちゃうよ、千代ちゃん」といつも通り明るく話します。そこに現れた千代。自分に見立てた手作り人形を石丸に渡します。

次々に食堂を出る隊員たち。最後に食堂を出る彰は百合に「幸せにな」とだけ告げます。

食堂を飛び出し彰に抱き付く百合。「行かないで」必死に引き留めるも、これ以上は迷惑と悟り、彰と別れを告げます。

出撃の朝、お見送りに行くツルと千代。しかし百合は昨日きちんとお別れをしたからと一人鶴屋食堂に残ります。食堂を掃除中、ツルが隊員たちから預かった家族への手紙が入った箱を落とします。その中には「百合へ」と書かれた手紙が。彰は家族にではなく、最後の手紙を百合に送っていたのでした。

百合は自転車に乗り急いで出撃場所に向かいます。多くの人に見守られながら出撃する隊員たち。家族の写真、渡された人形、そして彰はあの丘の百合一輪と一緒に出撃します。到着し彰を見送る百合。「彰」と絶叫した刹那、気を失い、気付くと制服姿のままあの洞穴にいました。現代に戻った百合は自宅に帰ります。そこで僅か半日しか経っていない事を知ります。

翌日、今までと同じように登校する百合。担任より「明日社会科見学に行くぞ」と言われます。社会科見学の間は特攻隊員たちの資料館。そこで特攻隊員として飛び立った彰、石丸達、その後生き残り幸せに暮らしたであろう板倉の写真を見ます。そしてその横には隊員たちが家族に送った手紙、その中に「百合へ」と書かれた手紙がありました。「百合へ、あの時百合の事を妹のようだと言ったのは嘘です。私は百合を愛していた。百合ただただ幸せになってくれ」。彰の想い、自分が死ぬ間際になっても百合を気に掛ける手紙。「彰に会いたい」泣き崩れる百合。

自宅に戻った百合は、母のために夕食と、夜食を用意。帰宅した母に「教師になりたい。大学に行かせて下さい」と告げます。彰との夢を叶えるために。

○感想

初めに言っておきます。もう上映は終了しているかもしれませんが、もしこれから観に行かれる方がおられたら、ハンカチやタオルは必須です。恐らく涙が止まらない事と思います。

予告編を観ていつか行こうと思っていた映画ですが、何とか上映期間中に行く事が出来ました。

戦争ものは基本戦争の悲惨さを伝える作品が多いですが、本作は戦争の悲惨さを伝えつつも、恋愛要素を打ち出した作品です。しかし決して戦争を美化した作品ではありません。この時代も人々は皆助け合い、褒め合いながら生きています。何故このような方々が若くして亡くならなければいけないのか。それを考えさせられるだけでも十分戦争美化の作品ではないでしょう。

落雷に打たれてタイムスリップするのはある意味、SF 物語の定番かと思いますが、まさかこのような作品にぶっこんでくるとは驚きです。結局、何故タイムスリップしたのか、何故戻ったのかとかの説明はありませんが、この作品にそのような疑問を持つのは無粋でしょう。SF 作品であれば百合が「8月15日に戦争は終わる」とか現在の制服を見せて「こんな物今の時代にないでしょ」とか色々言って彰を説得し二人で逃げるのでしょうか、誰も

そんな進行この物語に望んでいませんので、そんな考えも無粋です。

私が一番涙したシーンは寺岡が「出撃命令が下りました」と言うシーンです。予告編を観ていましたし、仮に予告編を観ていなくとも、この作品の性質上、彰たち特攻隊員の死は免れない事はわかりきっていました。しかし頭の片隅でどこか0.00001%でもこのまま特攻に行かず戦争が終わり、百合と彰が幸せに暮らさないかなあと考えてしまっていたので、このシーンで一気に現実を突きつけられた気分でした。

物語序盤は、戦争末期とはいえ、百合周辺は平和で陸軍指定の食堂という事もあり、一般人に比べれば食料にも困っていない様子でした。だから物語中の百合同様、どこか後2ヶ月この生活を送れば戦争は終わると思っていた最中、まさかのB29来襲にここでも戦時中の現実を突きつけられた思いでした。この非情なシーンを観ながら、これでも戦争を続けるのかと某国に非常に怒りを覚えました。

今回あらすじ紹介の冒頭、百合が家出した理由を細かく書きました。このような場合、「百合は家庭や学校に不満があり家を飛び出す」程度の説明で十分ですが、あえて書きました。理由は簡単で、魚をさばく仕事をしていた母親に誇りを持たなかった百合が、タイムスリップ後の世界では食堂に勤め魚をさばく仕事に就き、きっと母親の日々の努力を理解した、母親を尊敬し直したであろうと思ったからです。

もう一つは考えすぎかもしれませんが、父親が人を助ける為に亡くなったという現実。愛する人のためと、全く赤の他人の子供を助けたためでは理由は違うかもしれませんが。しかし自分の命をかけて人を救った事に、特攻隊員たちの気持ちを重ねる事が出来たのではないかと、ひいては尊敬できなかった父親を尊敬とまではいかなくとも、優しい気持ちを十分理解出来たのではないかと思ったのです。もちろん、人のためとはいえ命を投げ出す事を手放しで称賛したり、美化したりする意図はありません。あくまで娘の父への想いの変化という意味です。

パンフレットには、彰たちの手紙が全文掲載されており、これを読むとまた涙します。平和な時代に二人が出会っていたら…と何度も考えさせられる話です。

物語中には百合と彰が二人でかき氷を食べ、二人して「幸せの味」と感想を言うシーンがあり、どのような世の中でも幸せを感じる、幸せを求める大切さが描かれます。また逆に空襲で親を亡くした孤児に「戦争は終わる、日本は負ける」と告げる百合を見つけた特高警察が激しく詰めよる理不尽なシーンもあり、このような時代に決して戻ってはいけない事も考えさせられます。

もちろん、このような時代を一生懸命生きた人たちがいたから今の世の中がある訳で。そんな思いを込めながら合掌。

この感想を読んで頂くだけで、本作が決して戦争美化の作品ではない事がご理解頂ける事と思います。

いつもの事ながら原作は読んでおらず、映画も一回観ただけなので、あらすじやセリフは

適当です。特にセリフはだいたいこんな感じだった程度なので、あくまで参考まででお願いします。まあ五千字のこの文章をここまで読んだ人がいるのであればの話ですが。